

全油販連会員の会社紹介

島商株式会社

創業 1716 年 植物油脂卸売業、自然健康食品・グロサリー品卸売業、不動産管理業を営む。

島商株式会社沿革

江戸時代 ; 創業

安永年間より代々屋号を「山十・島屋新助」と称し、嘉永 4 年(1815 年)の旧幕引継諸「諸問屋名前帳」には、日本橋小網町「住吉荒物問屋」「通町組小間物問屋」「島屋新助」と記録されている。島商株式会社は、過去帳によると、延享元年(1744 年)武蔵屋吉右衛門から始まっているので、創業は享保年間に遡ると推定される。

明治時代 ; 油・荒物販売

明治 31 年刊の「日本商工営業録」には「油・荒物・島屋」として載っていることから、明治時代から油専門問屋になったと推測される。伝馬船で小網町河岸に運ばれた荷は、関東一円に売られていた。

大正時代 ; 関東大震災の悲劇

大正 6 年、ライジングサン石油(後のシェル石油)の販売組合「東京貝印揮発油組合」の設立に参加。同年「竹本油脂株式会社」、後に「日清製油(現、日清オリオグループ株式会社)の特約店となる。竹本油脂の売約帳に「山十商事貨車〇〇台」の注文が残っている。



「...からしい。ソリメンなど、
「...によって扱ったのだが、冬
ると、二つの倉庫を一ぱいに
また、普賢な經營ぶりだっ
る。」

大正 12 年、関東大震災で家族・店員の殆どを失う。たまたま別邸にて宿題をやっていた増次郎(当時 18 才)が大学を卒業後、九代目を継ぎ事業を再興する。

昭和 ; 石油と共に歩む

昭和 16 年、第二次世界大戦の統制強化に伴い、石油・油糧配給公団の指定店となり配給業務に専念する。後に「合資会社島田新助商店」になり、菜種油、胡麻油、椿油、小麦粉、蕎麦粉、澱粉などを扱っていた。昭和 20 年東京大空襲で焼失した小網町の店・倉庫を再建し、シェル石油、日清製油、竹本油脂の特約店として再出発する。昭和 31 年東部興業(現・東部ケミカル)設立、シェル化学製品の卸売りを主業務とする。昭和 39 年社名を 島商株式会社に変更。昭和 41 年、(株)シェルガーデン設立(株主:シェル石油、島商、国分) 後、10 代目島田孝克が経営に参画、島商を継ぐ。事業拡大も行うが、1996 年には石油部門を売却。



創業当時のシェルガーデン

平成～現在

平成元年、本社ビル CANAL TOWER(キャナルタワー)新築落成、オフィスビル賃貸業を開始。

2012年第11代目代表取締役社長に島田豪就任。コーポレートロゴを変更し、ホームページやパンフレットなど一新。次のステージへ。



現在；油の啓蒙活動

オリーブ(オリーブオイル)ソムリエ取得 幅広い分野でセミナーを開催し良い油の普及活動に努める。食育活動の実施や、レストランで食のイベントも開催。

バジル栽培し、バジルを取って、バジルペーストを作る会 with olive oil



小売業の遺伝子と油のノウハウを生かし、商品開発と販売を行う。

12/2 日経 朝刊

13 新興・中小企業 12版 【第三種郵便物認可】

東京証券取引所のある日本橋兜町や日本橋茅場町と、川をはさんで向き合う日本橋小網町。江戸時代から1923(大正12)年の関東大震災まで、白い蔵がずらりと並び、さまざまな物資を船から荷揚げする流通センターだった。

享保年間(1716〜35年)に創業し、現在はごま油などの植物油や調味料を卸売りする島商(東京・中央)は、小網町の発展とともに事業を拡大。江戸期から油、しょうゆ、酒や日用雑貨を商った安永年間(1772〜80年)に屋号を「山十 島屋新助」とし、マークの山の形は取扱商品の香辛を表現していた。

「島屋は最初、生活必需品を幅広く扱っていたが、次第に専門問屋へ切り替わっ

ていった歴史がある。島商も明治に入って油の専門問屋になり、菜種油、ごま油など主力商品にした。

1917(大正6)年に、ライシグサン石油(現在の昭和シェル石油)の製品を販売する業者の組合「東京買印揮発油組合」の設立に参加。20世紀が「石油と

200年企業

—成長と持続の条件

事業引き際も決断速く

島商、環境分野で先を読む

大正末期の勤務規定

「島田豪就任後、合資会社「島田新助商店」と名乗っていた島商は勤務規定を制定した。「出勤は8時半まで」「正午にいったん出先から戻り、報告すること」給料は一切、前貸ししない」といった内容。震災後の厳しい経営環境を乗り切るため、社内の規律を高める狙いがあったとみられる。1925(大正14)年の「社員相談記録帳」にそれらの規定がみえる。

自動車世紀」になることをにらみ、ガソリンを取扱商品に加えた。

のちに9代目になる島田増次郎氏は、関東大震災で改称したシェル石油や、日清製油(現・日清オイル)と同親と店員の大半を亡くし、

たが、終戦後、家業の再興に相次ぎ手を打った。48年にライシグサン石油から増次郎氏に引き継がれた。増次郎氏は、関東大震災で改称したシェル石油や、日清製油(現・日清オイル)と同親と店員の大半を亡くし、

して本業を固め直し、59年、化学分野に進出。シェルの化学製品を卸売りする東部興業(現・東部ケミカル)を設立した。

66年には島商とシェル石油の共同出資で新会社「シエルガーデン」を設立。東京・自由が丘の給油所に併設する形で、高級スーパーレストランを開業した。

「シエル」の歩みをとどめてきた。増次郎氏は島商の「200年企業」と変わらない。が、島商にももうひとつ特色がある。事業から身を引くときの決断の速さだ。

69年にシェル石油が60%島商が40%を出資し、

ガソリンを系列スタンドにと譲渡し、83年、経営を親卸す中央シェル石油販売を在のセングループにゆた設立。同時に増次郎氏は島商の石油販売部門も、シェルの経営権を握る新会社に統合した。石油販売の拡大路線を一転して修正した。

その後、10力所ほど持っていた島商直営のガソリンスタンドも中央シェル石油に移管。増次郎氏の次男の島田孝克・島商社長によれば「父はシェルの情報交換を通じて、ガソリンスタンド間の競争が激しくなると読んだ」。96年に増次郎氏は「父はシェルの情報交換を通じて、ガソリンスタンド間の競争が激しくなると読んだ」。96年に増次郎氏は

無料巡回バスを運行している。再生エネルギーの需要増を見越したもので、これに「撤収も進出も」機をみるに敏」な遺伝子は、今もしっかりと受け継がれている。

(編集委員 水野裕司)